

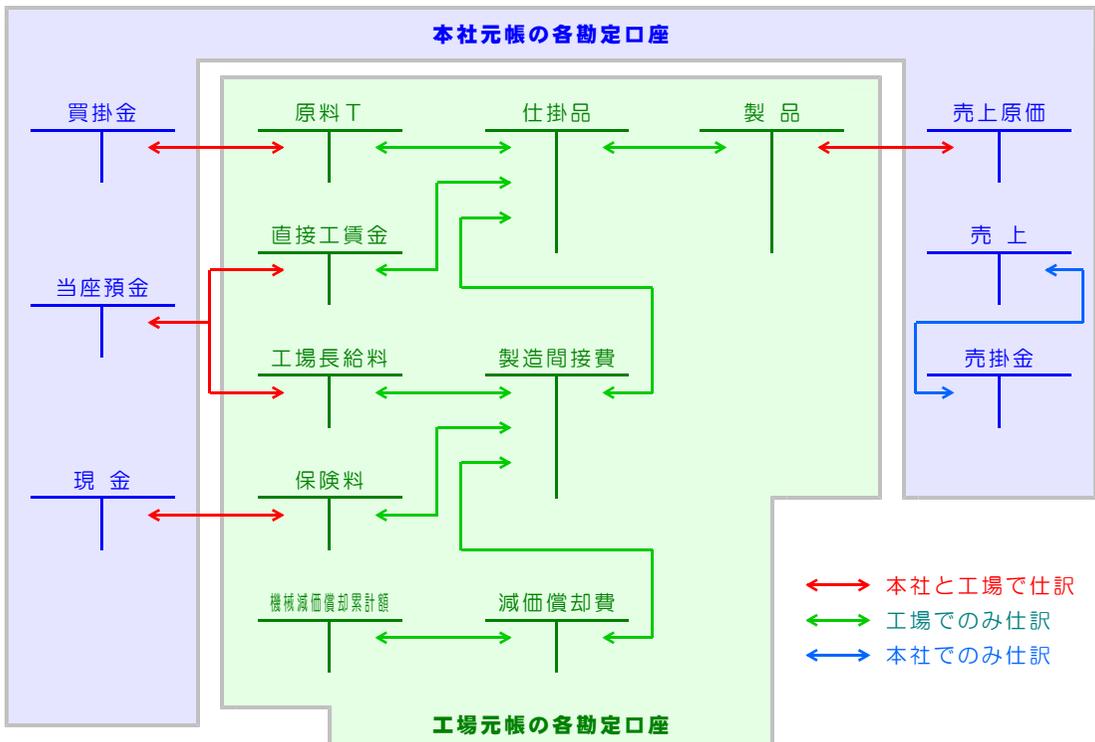
第13章 本社工場会計

企業規模の拡大などによって、本社機能は都心部に残し、工場を土地の安い遠隔地に移転するようになると、工場の会計を本社から独立させて、製造活動に関する記録・計算を工場に行わせるのが一般的となります。このような企業に適用されるのが「本社工場会計」です。

本社工場会計になっても、計算や記帳の流れが今までと大きく変わるわけではありません。今までの計算記帳事務を本社と工場とで分担して行うイメージです。たとえば、本社だけが持っている勘定口座しか使わない仕訳は本社だけが仕訳を行い、工場だけがもっている勘定口座しか使わない仕訳は工場だけが仕訳を行います。ただし、両者が持っている勘定口座にまたがるような仕訳は両者ともに仕訳を行うことになり、その際に、本社では「工場勘定」を、工場では「本社勘定」を使用することになるので、留意して下さい。

1. 本社元帳と工場元帳

本社と工場がそれぞれどのような勘定口座を担当するかは、問題によって異なります。一般的には、安全面を考慮して、現金や金銭債権債務（たとえば、売掛金、買掛金、未払金など）に関する各勘定口座を工場には担当させません。従って、特に問題の資料から判明しない限り、現金、当座預金、売掛金、買掛金、未払金などの各勘定は本社が担当していると考えて下さい。また、営業費や製品売上に関する勘定口座も、当然に本社が担当することになります。

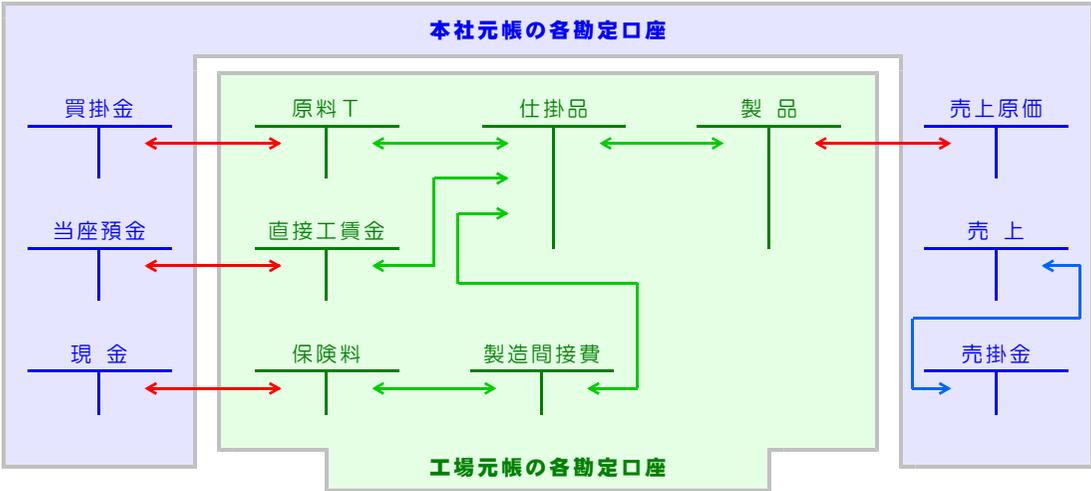


※ 本社工場会計を採用している企業では、材料は本社が発注して工場に直送してもらい、完成品は工場から得意先に直送して代金は本社が受け取るのが一般的です。

2. 本社工場会計における仕訳

2-1 本社工場会計における仕訳

現金や金銭債権債務（たとえば、売掛金、買掛金、未払金など）に関する各勘定口座を本社が担当している一般的なケースを利用して、本社と工場で行われる仕訳を検討します。



(1) 本社の勘定口座と工場の勘定口座にまたがるような取引

① 原料Tを10,000円で掛け仕入れした。

まず、工場会計を独立させていない場合の仕訳を行う。

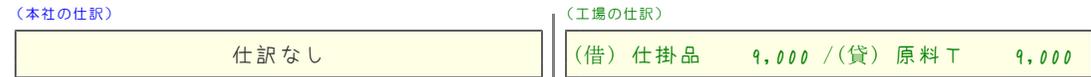


② 製品（原価 20,000円）を得意先に引き渡したので、売上原価勘定に振り替えた。



(2) 工場の勘定口座だけを利用する取引・本社の勘定口座だけを利用する取引

① 直接材料費 9,000円を仕掛品勘定に振り替えた。

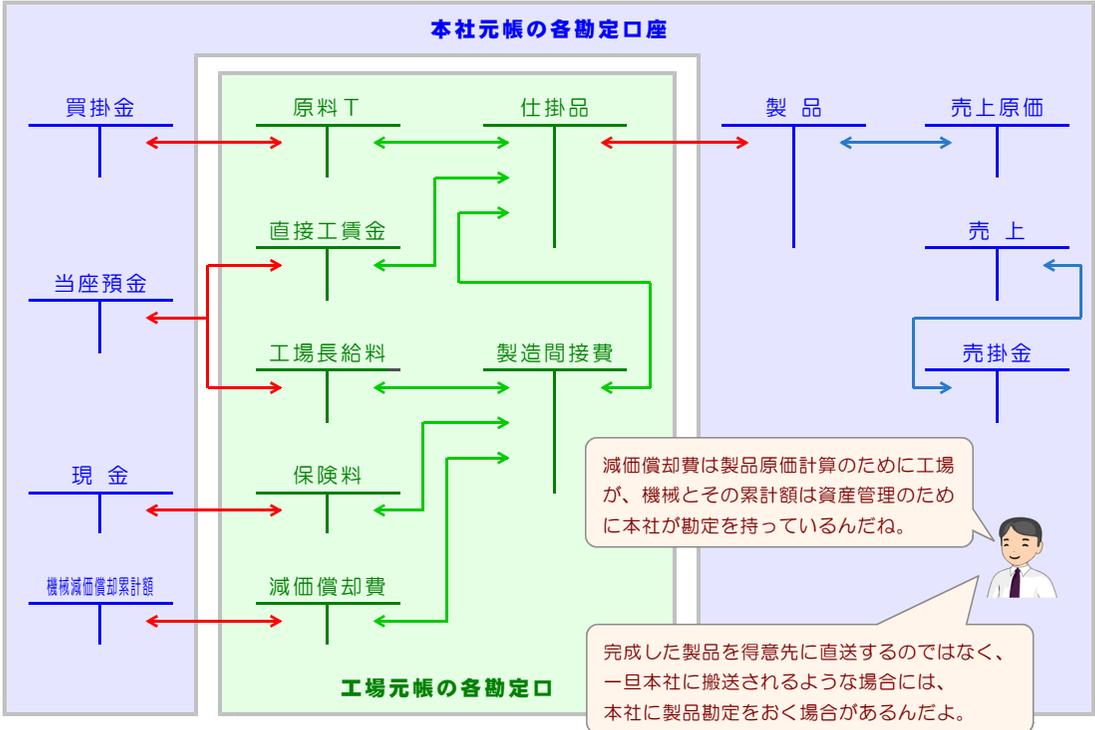


② 製品を 30,000円で掛け販売した。



2-2 本社工場会計における仕訳（応用形）

本試験では、様々な応用問題が出題されます。問題に与えられている条件をよく読んで、本社と工場がそれぞれどの勘定口座を担当しているのかを明確に理解しないとうまく解けません。ここでは、完成した製品を直ちに本社の製品倉庫に搬送するため、製品勘定を本社が担当している場合の仕訳を検討しましょう。



① 原料Tを10,000円で掛け仕入れした。

(本社の仕訳)

(借) 工場 10,000 / (貸) 買掛金 10,000

(工場の仕訳)

(借) 原料T 10,000 / (貸) 本社 10,000

② 製品（原価20,000円）を得意先に引き渡したので、売上原価勘定に振り替えた。

(本社の仕訳)

(借) 売上原価 20,000 / (貸) 製品 20,000

(工場の仕訳)

仕訳なし

③ 直接材料費9,000円を仕掛品勘定に振り替えた。

(本社の仕訳)

仕訳なし

(工場の仕訳)

(借) 仕掛品 9,000 / (貸) 原料T 9,000

④ 機械の減価償却費4,000円を計上した。

(本社の仕訳)

(借) / (貸)

(工場の仕訳)

(借) / (貸)

⑤ 製品を30,000円で掛け販売した。

(本社の仕訳)

(借) 売掛金 30,000 / (貸) 売上 30,000

(工場の仕訳)

仕訳なし

設例 1 本社工場会計

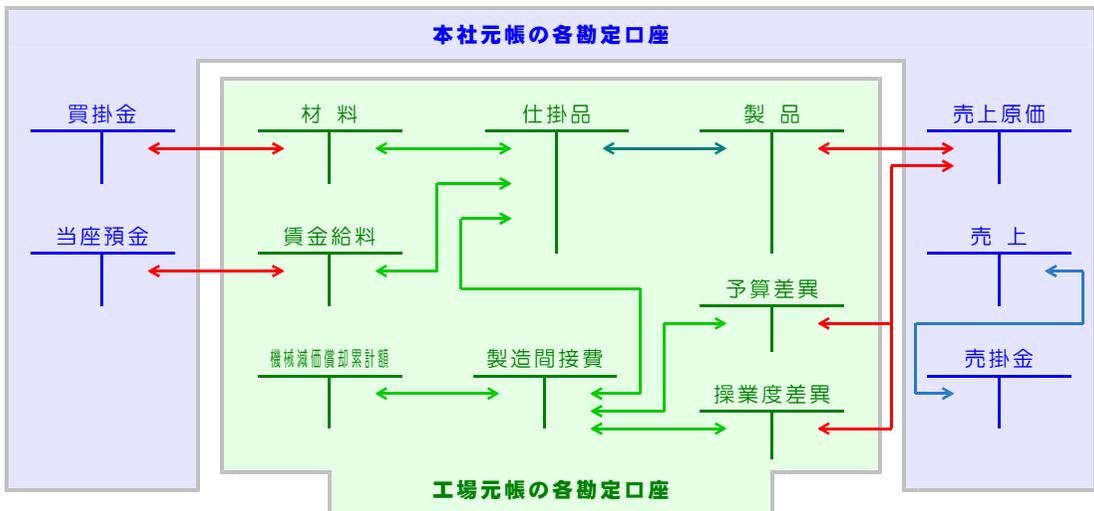
F工業では、工場会計を独立させている。材料の発注と代金の支払いは本社が行うが、材料は仕入先から工場の材料倉庫に直送させている。また、完成品の販売や代金の回収は本社が行うが、製品の発送は工場にある製品倉庫から得意先に直送する。その他、現金や金銭債権債務に関する各勘定口座は、本社が管理している。そこで、本社及び工場で行われる仕訳を示さない。なお、仕訳が行われない場合は、借方科目の解答箇所に「仕訳なし」と記入すること。

解答上使用できる勘定科目

買掛金	当座預金	本社
現金	製品	工場
機械減価償却累計額	製造間接費	仕掛品
予算差異	賃金給料	操業度差異

- (1) 工場従業員への給与 20,000円が当座預金口座から引き落とされた。
- (2) 直接作業時間を配賦基準として製造間接費を各製造指図書に予定配賦した。なお、当工場の年間の製造間接費予定配賦率は60円、当月の実際直接作業時間は200時間である。
- (3) 予定配賦の結果生じた予算差異600円（不利差異）と操業度差異300円（不利差異）を製造間接費勘定から予算差異勘定と操業度差異勘定に振替えた。
- (4) 機械の減価償却費30,000円を計上した。
- (5) 製品90,000円が完成し、工場の製品倉庫に保管された。

本間の場合、本社と工場の各勘定口座は次のような関係になります。



	本 社 の 仕 訳				工 場 の 仕 訳			
	借方科目	金額	貸方科目	金額	借方科目	金額	貸方科目	金額
(1)								
(2)	仕訳なし				仕掛品	12,000	製造間接費	12,000
(3)	仕訳なし				予算差異	600	製造間接費	900
					操業度差異	300		
(4)	仕訳なし				製造間接費	30,000	機械減価償却累計額	30,000
(5)	仕訳なし				製品	90,000	仕掛品	90,000

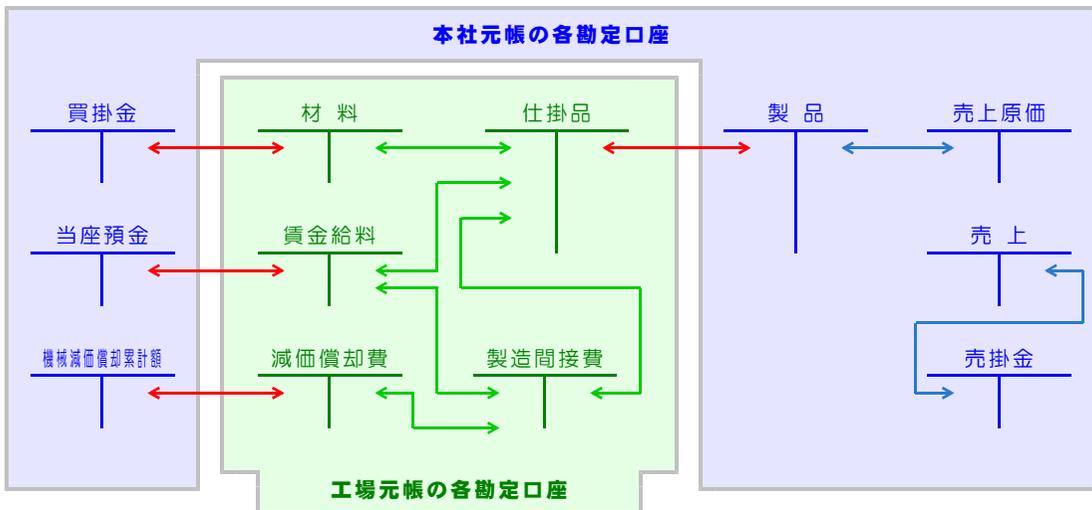
設例2 本社工場会計

FIN工業では、本社工場会計を採用しており、材料の発注は本社が行っている。完成した製品は、直ちに本社にある製品倉庫に搬送され、保管される。当月の次の取引について、本社及び工場での仕訳を示しなさい。なお、仕訳が行われない場合は、答案用紙の借方科目の解答箇所「仕訳なし」と記入すること。

解答上使用できる勘定科目

材	料	製	造	間	接	費	本	社
賃	金	給	料	減	価	償	工	場
機	械	減	価	償	却	累	仕	掛
当	座	預	金	製	品	未	払	金

- (1) 材料 30個（購入価額 400円/個）を購入し、代金は小切手を振出して支払った。なお、購入に際し、本社は 600円の引取運賃を現金で支払っている。
- (2) 直接工及び間接工による当月賃金消費額を計上した。直接工の予定賃率は 80円/時間、当月の作業時間は、直接作業時間 860時間、間接作業時間 120時間、手待時間 20時間であった。また、間接工については、当月賃金支払高 18,000円、前月賃金未払高 6,000円、当月賃金未払高 5,500円であった
- (3) 工場において、機械の減価償却費を 4,000円計上した。なお、減価償却累計額の勘定口座は、本社元帳に設けられている。
- (4) 製品 90,000円が完成し、本社にある製品倉庫に搬送された。



	本 社 の 仕 訳				工 場 の 仕 訳			
	借方科目	金額	貸方科目	金額	借方科目	金額	貸方科目	金額
(1)								
(2)	仕訳なし				仕掛品 製造間接費	68,800 28,700	賃金給料	97,500
(3)	工場	4,000	機械減価償却累計額	4,000	減価償却費	4,000	本社	4,000
(4)	製品	90,000	工場	90,000	本社	90,000	仕掛品	90,000

第14章 本試験対策（解答）

日商2級の本試験では、第4問と第5問が工業簿記からの出題です。過去問をみると、個別原価計算が第4問として出題されたり、第5問として出題されたりしていますので、各問の範囲は特に意識する必要はないようです。問によってかかる時間は変わってきますが、20分程度を目安にして下さい。それでは、合格ラインである7割を目指して頑張ってください。

第4問対策 経費の計算（20点）20分

F工業の製造原価に関する下記の資料を利用して、答案用紙に示した7月の製造間接費勘定、仕掛品勘定、製品勘定、及び売上原価勘定の空欄に適切な金額を記入しなさい。なお、F工業の決算日は12月31日である。

[資料]

1. 下請に加工依頼していた部品が納入されたため、その全量を製造工程に投入した。なお、この部品は納入業者に対して無償支給していたものであり、当社はその加工賃 260,000円を現金で支払った。
2. 特許権使用料は、製品の生産量に比例して6ヶ月ごとに支払う契約になっている。7月の生産量に対する特許権使用料の要支払額 222,000円を未払計上した。
3. 年間の棚卸減耗費予算額は 180,000円である。1ヶ月分を引当計上した。
4. 毎年7月1日に火災保険料を1年分前払いしている。支払時に前払保険料勘定で処理するため、当月分を経費計上した。なお、支払額 1,476,000円は小切手を振り出して支払った。
5. 工場内における償却資産の減価償却費年間予算額は 7,260,000円である。7月分を経費計上した。
6. 修繕引当金の当年度繰入予定額は 1,440,000円であり、7月分を経費計上した。
7. 工場内の福利厚生施設の収支報告書によると、7月の運営赤字が 84,000円あったため、工場長が同額の小切手を振り出し、施設管理者に手渡した。
8. 7月2日に欠員した工員を補充するために、工員を募集し7月6日に雇い入れた。この募集に係る費用 120,000円を現金で支払った。
9. 7月に発生した間接材料費は 1,230,000円、間接労務費は 2,853,000円であった。
10. 7月に投入された直接材料費は 4,740,000円、直接労務費は 6,462,000円であった。